失語症語彙検査の開発

○物井寿子[1]（ものい ひさこ）、藤田郁代[2]、古谷二三代[2]、植田 恵[2]、
笹沼澄子[2]、小野久里子[3]、奥平奈保子[4]、下垣由美子[4]、藤原由子[5]

小平市障害者福祉センター[1]、国際医療福祉大学[2]、国立身体障害者リハビリテーションセンター[3]、
東京都リハビリテーション病院[4]、津田沼中央病院[5]

（要旨）失語症患者の示す症状を、単語の処理という側面から評価することを目的に、以下の検査を作成し、健常者のデータを収集した。すなわち①語彙判断検査、②名詞・動詞検査、③意味カテゴリー別名詞検査、④類義語判断検査である。一部を除き、各検査とも可能な範囲で、頻度、心像性などの単語属性を統制した。健常者は、30　40、50、60、70 歳代の各年代 10 名以上である。各検査の内容、および健常者の成績について報告する。

Key words: 失語症、語彙検査、単語属性、健常者データ

目的　単語の表出および理解の障害はほとんどの失語症患者にみられるが、その症状は多彩であり、発現機序も一様ではないと考えられる。近年、脳内の単語情報処理システムについては、認知神経心理学や脳画像法など各方面からの研究も盛んである。言語治療ではそうした方面の知見も取り入れ、個々の患者の障害パターンをできるだけ正確に把握し、適切な治療を実施することが求められる。しかし、我が国には単語の処理に関する臨床的検査はほとんど存在しない。そこで今回、語彙検査の一部として、①語彙判断検査、②名詞・動詞検査、③意味カテゴリー別名詞検査、④類義語判断検査を作成した。

検査の概要

①語彙判断検査；4種類の検査を作成した。

語彙判断検査Ⅰ（漢字提示）　単語、非単語それぞれ 80、計 160 語の刺激からなる。単語は、漢字2字熟語で、高頻度高心像語、高頻度低心像語、低頻度高心像語、低頻度低心像語各 20 語である。非単語は単語を構成する漢字をランダムに組み合わせたものである。同音異義語が含まれているため、音声提示には向かない。

語彙判断検査Ⅱ（平仮名提示、音声提示）刺激は単語、非単語それぞれ 20 語、計 40 語からなる。単語は、よく知られている名詞で、平仮名が通常表記あるいは平仮名表記が不自然ではない3文字語である。この条件を優先したため、頻度、心像性は統制していない。非単語は、単語に含まれる1つの子音を構音点と構音方法が異なる子音へ置換したものである。

語彙判断検査Ⅲ　単語の選択条件、刺激数はⅡと同様である。非単語は、単語の仮名文字を順序転換したものである。

語彙判断検査Ⅳ　単語の選択条件、刺激数はⅡと同様である。一方、非単語は、単語とは類似せず、3つの仮名文字のランダムな組み合わせである。

検査の施行は、刺激を文字あるいは音声で提示し、「見たこと（聞いたこと）があるかないか」を答えさせた。

②名詞・動詞検査（表出、理解）；名詞検査と動詞検査、およびぞれぞれに表出と理解の検査がある。検査語は各検査とも 40 語、またすべての検査において頻度を統制した。名詞と動詞の表出検査間および理解検査間の頻度には有意差はなく、その点で検査間の比較ができるようにした。名詞表出検査の検査語は、高頻度、低頻度語各 20 語、各頻度群の検査語は意味カテゴリーが同等になるようにした。名詞理解検査に用いた単語は、頻度の他に心像性を統制した。理解検査の反応は絵の 1/4 選択によったが、3つの誤選択肢は、意味的近似度が段階的に低くなるようにした。動詞表出検査および理解検査の単語は、高頻度、低頻度語各 20、各頻度群の単語は概念分類的（意味役割構造および様態の分類）に同等になるようにした。理解検査の反応は名詞検査と同様、絵の 1/4 選択、3つの誤選択肢は、意味的近似度が段階的に低くなるようにした。

検査の施行は、名詞、動詞検査とも、表出検査では線画を提示し喚語させ、理解検査では音声提示により4枚の線画から選択させた。

③意味カテゴリー別名詞検査；表出と理解検査があり、

連絡先：〒324-8501 栃木県大田原市北金丸 2600-1　Tel. 0287-24-3000　（藤田郁代）

検査語は共通である。検査語は 10 種類の意味カテゴリーからなり、各カテゴリーには、高親密度、低親密度語各 10 語が含まれ、合計 200 語からなる。カテゴリー間の親密度は統制した。

検査の施行は、表出検査では線画を提示して呼称させ、理解検査では音声提示により同一カテゴリーの 10 枚の線画から選択させた。

④類義語判断検査（文字提示、音声提示）；検査語対は高、低心像語対各20（類義語対、非類義語対各10）、計 40 対である。高、低心像語の頻度は等しくなるようにした。

検査の施行は、検査語対を文字提示、あるいは音声提示し、類義語か否かを答えさせた。

対象　30 40、50、60、70 歳台、各10 名以上の健常成人である。教育年数は 6 年以上。対象の人数、男女比は検査毎に多少異なった。

結果　各検査の平均得点と SD および分散分析の結果について述べる。

①語彙判断検査

語彙判断検査Ⅰ（漢字提示）；全被験者の平均得点は 156.0/160（SD=5.18）であった。年齢、性の効果は有意ではなかった。一方、語彙性の効果は有意であり（P<0.05。以下同様）、単語の得点のほうが高かった。さらに単語の頻度および心像性の主効果、交互作用が有意であり、高頻度、高心像語で得点が高く、低頻度の中では高心像語の得点が高かったが、高頻度では差がなかった。

語彙判断検査Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ（平仮名提示、音声提示）；全被験者の平均得点は平仮名提示で順に 39.7/40（0.75）、39.6/40（0.93）、39.6/40（0.74）、音声提示で 39.7/40（0.80）、39.9/40（0.39）、39.7/40（0.61）であった。年齢、性の効果はいずれの検査においても認められなかった。語彙性の効果は、ⅡおよびⅣの音声提示において認められた。

②名詞・動詞検査

名詞検査の表出（呼称）、理解の平均得点はそれぞれ 39.1/40（1.08）、39.8/40（0.54）であった。動詞検査の表出、理解の平均得点はそれぞれ 39.6/40（0.62）、39.8/40（0.51）であった。名詞と動詞の平均得点の差をt検定でみたところ、表出では動詞が有意に高得点であった。理解では差がなかった。名詞表出検査では、年齢、性の効果はなかったが、頻度効果が有意であった。名詞理解検査では、頻度、心像性効果、および頻度×心像性、年齢×頻度×心像性の交互作用が有意であった。動詞検査では、頻度効果が表出で有意であり、低頻度語のほうが高得点であった。

③意味カテゴリー別名詞検査

呼称、理解の平均得点はそれぞれ 193.4/200（5.43）、199.4/200（0.95）であった。年齢、性の効果はいずれも認めなかった。呼称では親密度の効果が有意であり、高親密度語が高得点であった。またカテゴリーの主効果および性別×カテゴリーの交互作用が有意であった。

④類義語判断検査（文字提示、音声提示）

全被験者の平均得点は文字提示で 38.8/40（1.64）、音声提示で 39.3/40（1.05）であった。年齢、性の効果をみたところ、文字提示において年齢の効果が有意であり、高年齢のほうが高得点であった。心像性効果はいずれも有意であった。

まとめ　総体的に健常者の成績は良好であった。性および年齢の効果はごく一部の検査を除き認められなかった。逆に頻度、心像性、親密度などの単語属性の効果は認められるものが多かった。

謝辞：親密度の使用を快諾して下さった NTT コミュニケーション科学基礎研究所の天野、近藤両氏に深謝申し上げます。

資料

・国立国語研「現代雑誌 90 種の用語用字」1962
・小川、稲村「言語材料の諸属性の検討」1974
・厳島、石原ら「漢字二字名詞 600 語の諸属性調査」1991
・杉村、栗山「刺激の具体性と心像性」1972
・国立国語研「分類語彙表」1964
・岡田「言語処理のための動詞概念の分類」1970
・天野、近藤「日本語の語彙特性」1999
・大野、浜西「類語新辞典」1981
・阪本「新教育基本語彙」1984